



Kazé



ルヴァン便りNo.3

2011.7.11

あの太平洋戦争が終わった時ほど日本中の人の頭がでんぐりかえたことはなかった。考えがこんなにでんぐり返ったことは歴史上でもなかった。でも西村伊作はでんぐり返ったりしなかった。こういうひとは実はわずかながら他にもいたのである。

当時、日本という鳥籠の外にいた人達である。でも、その伊作も終戦後アメリカの兵士達が迫駐してきたのを見て、“ヘーそうか”と発見したことがあった。

彼等が自由に走らせていた自動車で、これは日本人が初めて見るジープであった。

そのジープはドアもなく、一切必要なものだけで出来ている。売る商品ではないので全然美しさなんて考えないで作られたものであった。それが今まで知らなかったカッコ良いものに見えた。

普通の商品はみな、売るためだからへつらいがある。デザインのへつらいである。

街を歩いて見ていると、建物のデザインで悪い所は飾りである。それを取ったら良くなるのになーと思う。

大正11年に伊作は「装飾の遠慮」という本を出した。装飾を否定するのではなく、楽しいものとしてあっても良い。だが、遠慮してやるのがいいというのである。その遠慮してという言葉が面白い。

この頃からである。ヨーロッパのデザインの先端の動きが変わってきたのだ。例えばドイツのバウハウスの運動などこの頃である。当時ヨーロッパで見る過剰な飾りのものから必要最小限の飾りに変わってきた。

時代が変わったときに新鮮な考えが生まれる。伊作が終戦の時、目を付けて“ヘーそうか”と思ったのはアメリカ兵のジープであった。

「煉瓦の街並み」

西村伊作 油彩



西村伊作の建築を訪ねて その3

久野為和邸（大正14年完成）

久野邸は名古屋市市の南に隣接する東海市にあり、筆者の知る限りでは愛知県唯一の貴重な残存建築作品である。久野家は代々続く旧家で、御当主為和氏の父洵之助（きくのすけ）氏が主婦之友社を通じて西村に設計を依頼したとのこと。当時西村伊作は文化学院の創立者として、また新時代にふさわしい住宅や生活改善についてのオピニオンリーダーとして活躍していた。雑誌「主婦之友」とも関わりが深く、本誌は彼の住宅設計の記事を度々掲載していたのだ。

玉石を積んだ門の前に立つと、美しく刈り込まれた樹木を通してこの邸宅を垣間見ることができ、築後86年の歳月は建築・樹木を調和させ魅力的である。門を入ると左手南側に広い芝庭がひらけている。1階南面は粗いモルタル仕上げの三連アーチのテラスが目を引き、その上の二階はベランダである。庭から見上げると切妻屋根の三角破風が見られ、その破風に半円形のガラリ窓を設けている。これら三連アーチ、切妻破風、半円ガラリ窓などがこの南面を特徴付けている。

平面は1階が和室で二階が洋室主体となっているが、初めの設計では1階が洋室となっていて洵之助氏の要望で逆転させたという。そのことからすると西村はテラスに面した南面した和室を茶の間として設計したと推測する。

なお、久野邸は昭和5年の陸軍演習の際、東久邇宮殿下が宿泊され、その際幾分改修され現在に至っている。

建築史家 田中修司



伊作の欧米旅行日記 (2)

西村伊作は明治42(1909)年、25歳のとき、ドイツの汽船で欧米を中心とした世界一周の船旅に出、その間のことを日記に記している。前号のルヴァン便り No.2では、横浜を出航して神戸、長崎を経て上海沖までであった。ここでは、上海からシンガポールまでを紹介しよう。

なお、本日記はそのまま公開することを想定したものでないの走り書きに近く、文章は不備な点もあるが、その点は斟酌してお読みいただきたい。文中の〇〇は不明な箇所、句読点は筆者が加筆した。

●明治四十二年四月二日 (土)

上海へ行く小蒸気船は八時半に此船から出ると云ふので朝食は七時半であった。

風〇のため行かうかどうしやうかと考へて居る。船が出さうなので急いで乗り込んだ。小蒸気と云つても中々立派で大きい電燈などついて立派に出来て居る。上海の川を遡る事一時間半計りでほんとうの上海の町に付く。上海は実に立派な建物が併んで居る。六層の高樓軒をならべて立って居る。日本人が多く往来して居る。上海で同行の連れ四人、二人は英国人の夫婦老人である。ロンドンから四十二里程ある所に住んでいるような。一人は例の女医者。あちらこちらと町を歩いて大にくたびれた。女医先生は足がいたいとこぼす。それで我と二人、彼の夫婦者と別れて先の Hotel de Colonial といふ宿へ車で行って彼等夫婦の来るをまつて居た。そこで皆昼食をなす考えである。所が我らはあまり腹工合がよくない故、食堂に行かず Hall にてコーヒーとパンを食べた。それから彼等は電車で見物に出かけた。自分はあまり行きたくなかつた故、彼等と別れて一人で電車で正金銀行へ行き日本の金を英貨幣に Exchange して、それから南京路の〇英国商店に入り外套を求めた。弗45もするやつを買はされた。実に高い外の品も何でも此店は高かつた。後に一人で外套の値を云ふたら彼等は驚いて居つた。上海は凡て何もかも高い。但し場所によってやすい所もあるのだ。

上海は其繁かなる事海岸通りなどは目をまはす計りである。人車自動車電車の外支那特有の一輪車が〇るが如くに〇せ〇ふて居る。横浜や神戸の様な〇しとして居らぬ。夕方七時前に本船に帰った。上海の川の兩岸は柳の様な木が正に芽を出した所で、やはらかな色をしたのが立ならんで居るのは実に奇麗であて海の色を黄色ならしめるによりてあるのである。

●四月三日 (日)

3日は一日上海沖で暮した。雨が止んだ。船は夜九時頃出帆。上海から多くの人々が乗り込んだ故、食堂は大分賑かになった。喫煙室は〇〇甚賑かである。がやがやとさわいで居る。特に独逸人が一番大きな声を出してさわぐ。独逸人が多く乗って居る。彼等は自分の国の船であるので大に安心して心置なく居るのであらう。西洋人は女でも一人で安心して旅行して居る。恰も自らの国で自らの家に居いる如き心持ちで居るらしい。

●四月四日 (月)

朝十時に Church of England の Bishop で Hong Kong に居る人が上海から乗つて居つた。その人の説教が二等食堂であつた。〇するものは少なかつた。Bishop は妙な服を着て祈祷をなして本を見て長い事やる。朝から霧が甚しく一分毎に汽笛をならす。午後きりは幾分はれた。波が大分荒い。大きな波のうねりがある。少し頭が重く感ずる。

●四月五日 (火)

曇って居るが波は高くない。午後からだんだん暖気を増し夜はもう夏景色である。月が満ちて居つて静かな海へうつつてきらきらとまことに奇麗である。くれてから空はきれいにはれた。

夕方入日が甚奇麗であつた故、〇〇した昨夜から皆 dining dress を着て食堂に出る。自分をもって居ないから黒の背廣で御免を蒙る。一等客は皆ガヤガヤさわぐ故、食堂が実にハゲしい。それは楽隊が上ではやし立てる故、たまらない。二等客の人に聞くに二等客はしづかであるような。却つて二等客の方が行儀のよい健全なる人々が乗って居るらしい。食後二等甲で友田、寺田の兩人と話した。いろいろの話をした。星の話や天文の話しを聞いた。

●四月六日 (水)

朝食中に船は香港に付いた。船は香港の町の向側にある棧橋へ横付になる。そこから一町ほどの所から渡し船が香港へ通ふ。十五分毎である。二階になって居つて上が上等下が下等。勿論蒸気船が前へも後へも同じ様に行くやつである。上等の賃十五銭也。

香港は大きな家が多い。商店も皆大きい。十階もある家がある。皆エレベーターを備付てある。スースーと上下して居る。電車が海岸に沿って通つて居る。上等十銭、下等五銭也。香港は山で出来た島である。安藝半島の様だ。半熱帯で植物も熱帯的のが多い。皆青々と甚奇麗である。道路は〇〇〇〇清潔である。山の

上の道でも皆たたきである。植物園がある。実に奇麗で目がさめる花がではない木の色が〇〇〇砂が美であるからだ。ほととぎすの様な鳥が木之中でないて居る。山之頂上を peak といふ。ピークホテルがある。そこへ下から Cable Car がかかつて居て、三分ノ一位の傾きで引上られて行く。一寸きみが悪い。山の一番上に〇〇所がある。此鉄道の賃は上等往復五十銭である。

電車で行くとき Happy Valley と云ふ所に行く。そこは Race Course である。運動場もある。そこの番小屋に番人が居って、私に何か話をしかけた。番小屋の中なぞ見せた。彼の小屋はしゆろの葉を〇て作ってある。一寸風雅なものであつた。

●四月八日 (金)

香港から乗った客には日本人か支那人かと思ふ人が居る。彼はポルチュギースであるそうな。香港に生まれるものにて欧州へ行くとの事。Civil Service であると云ふ。よく英語を話す。彼等の祖先はポルトガルから来りシャムやフィリピン人等と inter marriage をなしたため、今アモイを根城とするポルトギースは皆一種の雑種である。又香港からの客は夫婦で七才計りの子供を携えたものがある。ヒリツピンに居たのだそ。その子には実に奇麗で丸で臘で拵へた様だ。白い顔計りでなく体も上の毛も白い。そして〇の様にやほらかい。さわればとろけそうである。日本人の子は赤子と云れて赤褐色をして居る。うらやましいと考へた。

だんだん暑くなつたが、甲板上は風が吹く故すずしい。独逸の商人にて二十四年も日本に居たと云う人あり。日本語を話す。曰わく日本の国はよい国であるが商人はよろしくない。

●四月九日 (土)

波は甚静かだ。こんなに毎日穏かだとは思わなかつた。暑さは益々加はる。海の色はほんとうの紺色だ。紺碧を湛へなど云ふが、日本の水は紺ではない緑がかつて居るが、此辺はほんとうに紺色だ。今丁度ホンコンとシンガポールの真中に位して居るだらう。数日前にはスチームで室を暖めて居たのが今は電気扇がぶうぶうなつて居る。船は昨日から南方へ向て居るらしい。

●四月十二日 (火)

客が多く乗り込んだ。食堂は一ぱいである。送別の為客がもらった花籠は甲板上に花園を作つた。レングホルの花は珍しいのがある。蘭と花〇布の〇みた様な花が実に奇麗である。マレイ人の銭ひらひが小舟に乗って銭の海中へ投げられるのを飛込んでひらう。船は小さい丸木船だが実に早く決して引くりかへらぬ。彼等の泳ぐのも実に達者なものである。

船は十一時半出帆した。島の間極狭い所を通りぬけてピーナンへ向ふ



西村伊作 当時のパスポート

2011年度 ルヴァン美術館のご案内

6月11日(土)～11月3日(木) 2011年
水曜日休館(但し7月15日～9月15日は無休)
10:00～17:00

企画展：

ルヴァン美術館15周年記念

個性の開花 小さくて善いもの—西村伊作

文化学院を築立った人々

村井正誠・坂倉新平・小野寺玄・久里洋二・李 仲燮
志村ふくみ・吉屋 敬・丹阿弥丹波子・西村八知
ソノ・西村ベガード・西本敏子・植田いつ子・平田暁夫
中村乃武夫・稲葉賀恵・佐藤杏梨・鳥居ユキ
クニエダ ヤスエ・長沢 節・松尾良彦・佐藤昌三
山内登貴夫・宮脇愛子・杉本苑子・神沢利子
木村 梢・吉沢久子・上 笙一郎



常設展：

「西村伊作と文化学院に携わった芸術家達の作品」

西村伊作・石井柏亭・裕 伊之助・山下新太郎・周 襄吉・有島生馬
棟方志功・赤城泰舒・佐藤春夫・山口薫・与謝野晶子・正宗得三郎

ルヴァン サマーコンサート

- ① 8月 6日(土) 大野若菜ヴィオラコンサート ¥2,000
(東日本大震災チャリティー)
 - ② 8月13日(土) ボサノバ/サバトス(木村 純・三四郎)
 - ③ 8月20日(土) 近藤和花ピアノコンサート
 - ④ 8月27日(土) 一噌幸弘「古今東西 笛 世界紀行」-能管・角笛他
壺井彰久(ヴァイオリン)デュオコンサート
(東日本大震災チャリティー)
- 開場：18:00 開演：18:30 ②③④ ¥3,000 (ドリンク付き)
ビュッフェ(予約制：¥1,800 17:00～)
会場：ルヴァン美術館 (0267-46-1911)
長野県北佐久郡軽井沢町長倉957-10

● コンサートのお申し込みはルヴァン美術館0267-46-1911へ

第8回 秋のアートフェスティバル

9月24日(土) 10:00～17:00 美術館入館無料
ルヴァン美術館の庭でのスケッチ大会・体験教室
美術館展示説明会 13:00～(無料)

*「西村伊作の建築—愉快的な家展」

INAX ギャラリー

2011年 6/3(金)～8/18(木)(名古屋)
9/1(木)～11/19(土)(東京)

☆ カフェテラスCafé Le Vent、ミュージアムショップLe Ventは常時ご利用いただけます

ルヴァン美術館：〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町長倉957-10 Tel: 0267-46-1911 Fax: 0267-46-1910
東京事務所：〒107-0052 港区赤坂9-6-14 Tel & Fax: 03-3401-8896 <http://www.levent.or.jp>